

Title	上海市の居住空間における「内」・「外」に関する領域意識構造の研究
Author(s)	李, 斌
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42403
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	李斌
博士の専攻分野の名称	博士(工学)
学位記番号	第 16299 号
学位授与年月日	平成13年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 工学研究科建築工学専攻
学位論文名	上海市の居住空間における「内」・「外」に関する領域意識構造の研究
論文審査委員	(主査) 教授 舟橋 國男 (副査) 教授 柏原 士郎 教授 吉田 勝行 助教授 木多 道宏

論文内容の要旨

本論文は、上海市の居住空間における「内」・「外」に関する領域意識について、行動の出現場所、意識されている空間範囲・場所、ならびに言語に表徴された場所の領有感覚等の側面から検討を行い、併せて居住者の「私」・「公」に関する意識構造の解明を試みた上で、都市空間から住宅団地および住戸に亘る「内」・「外」領域意識構造に関する模式を提起している。

第1章では、本研究の背景と目的を述べ、既往研究の検討を行って、本研究の位置づけを行っている。

第2章では、日中両国における「都市」に対する呼称から、日本の「町」と中国の「里」の起源とその変化過程、及び両国の都市と農村との関係を検討した上で、中国における都市の「内」・「外」に関する領域意識を抽出し、さらに、大阪市・上海市・北京市を対象として、都市空間構造の典型的な側面としての街路網と住居表示とに注目し、それぞれの特徴について考察を行って、都市空間構造を比較している。

第3章では、上海の伝統的住居様式である里弄（梅蘭坊）と解放後に建設された新村（馬当団地）という、中心市街地・廬湾区にある近接する二つの居住地区を対象地として、現地調査に基づいて、それぞれの屋外空間の利用実態、近隣交際の様態を明らかにした上で、両団地における居住者の「内」・「外」に関する領域意識と団地の空間構造との関係を検討している。

第4章では、上海市の里弄（梅蘭坊）と新村（馬当団地）において、居住者の日常行動・意識に関するアンケート調査により得られた結果から、「内」・「外」領域意識ならびに「私」・「公」に関する意識を把えてその構造仮説の提起を試み、その意識構造と居住空間構造ならびに居住者の年齢層及びその背景にある社会文化的変動との関係を考察している。

第5章では、中国の住戸における「内」・「外」領域意識にかかわる床の構造と坐の様式を検討し、日本の住戸における「内」・「外」に関する既往研究を参照して、両者間の類似および相違を論じている。

第6章では、各章の結論をまとめ、都市、住宅団地および住戸に亘る「内」・「外」領域意識の構造について模式を提起し、これに基づく居住地計画上の意義を述べて、今後の研究課題を示している。

論文審査の結果の要旨

上海市を初めとする中国の大都市における居住環境整備は、現代中国の都市整備における重要な課題の一つであるが、急激な開発行為の進展の下における伝統的居住文化の継承と変容・破壊との矛盾は深刻である。また、居住文化の継承は、単なる空間的・形態的な様相の表層的模倣ではなく、居住者の生活様式ならびにその背景に潜在する、歴史的に形成されてきた空間領域意識の構造に基づいた居住空間構造の継承が重要である。本論文は、この観点から、現代中国大都市の諸矛盾を抱える典型的事例の一つである上海市の居住空間を対象として、その「内」・「外」に関する居住者の領域意識構造の解明を試みたもので、得られた主な成果は以下の通りである。

- (1)中国の都市空間は、古代の井田制に由来する「里」・「坊」という街区による構成から、宋代以後、「大街」・「巷」・「胡同」という街路空間を基本とする構造に変わり、街区スケールが大きく街路密度が、例えば大阪市に比して約1/4と著しく低いことを実証し、街路方式住居表示の採用が合理的であることを示している。
- (2)里弄においては新村よりも外部空間利用が活発であり、近隣とのつきあいの程度も高いこと、ならびに、それが住戸・住棟および団地内外部通路にまたがる一連の空間の構造と密接に関わっていることを実証している。
- (3)「内」・「外」に関する居住領域意識に関して、団地全体を「内」的領域と捉える傾向は両地区に共通するが、新村より里弄においてその傾向はより一層顕著であり、「外」の都市街路空間に対して閉鎖的であることを明らかにしている。
- (4)新村に比して里弄では、居住者の近隣交際がより濃密であり、近隣への関心・関与が深く、「私」意識がオープンで相互に接近しやすく、それ故にかえって「公」への関心を高めていることを論証している。
- (5)「私」意識の構造と居住者の年齢層との関連は両地区に共通する傾向を示し、これが近・現代中国の社会文化変動に深く関係していることを分析している。
- (6)住戸における「内」・「外」領域について、特に関連の深い坐の様式および床の構造が、商品経済の著しく発展した北宋後期以降に、今日に繋がる椅子式・非架構床に大きく変化し、「内」・「外」の別は即物的で明確な空間区分に変化したこと、ならびに、この一連の変化は、宋代以降に見られる都市空間基本構造単位における街区から街路への変化と相俟っていることを示している。
- (7)上述の結果を総合して、上海の居住空間における「内」・「外」領域意識の構造モデルを提示し、それに基づく居住地と都市空間との関係性ならびに住棟・住戸計画の方向を論じている。

以上のように、本論文は、居住環境変化の著しい上海市において、居住者の生活意識・行動にとって基本的な意義を持つ「内」・「外」領域意識の構造を明らかにし、そのモデル化を行って居住空間計画の方向を基礎づける成果を得ており、建築工学、特に建築計画学・居住空間計画の発展に寄与するところ大である。よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。